

中国帰国者 3 世はどのようにその生を経験するか ——家族史と移民研究視角からの分析試論——

一橋大学大学院 山崎哲

1 目的

本報告は、中国帰国者 3 世の経験の多様性を、1 世の中国「残留」という歴史からの視角と移民研究の視角の両面から分析することを目的とする。中国帰国者とは、中国残留日本人とその家族を指す総称である。先行研究において、「二世三世を含めて中国帰国者の日本社会への定住化が進み、帰国した中国残留日本人（中国帰国者）の間に階層分化している」（蘭 2009: (24)）と報告されてきているが、その実態について知られることは稀である。本報告では、中国帰国者 3 世がどのように 1 世と 2 世の歴史や経験を継承しているのかという点に着目し、中国帰国者 3 世と呼ばれる人々の経験の多様性は何によって分岐するのかを分析する。

2 方法

機縁法により、日本生まれまたは学齢期以前に日本へ移住した中国帰国者 3 世 4 名（全員が成人）に生活史調査を実施した。そこでは、(1) 中国帰国者であることが移民としての中国帰国者 3 世の地位達成や階層移動にどのような影響があったのか、または無かったのか、(2) 移民第 1 世代である親世代（中国帰国者 2 世）の「受け入れ」社会への編入様式、人的資本、家族構成と文化変容が中国帰国者 3 世の人生にどのように影響したのか、の 2 点を中心にして半構造化インタビューを行った。得られたデータをもとに、分節的同化理論 segmented assimilation theory (Portes and Rumbaut 2001=2014) を分析枠組みとして経験の分岐点を分析した。

3 結果

今回の調査対象者 4 名の経験の分岐点となったのは、両親が日本語と日本の習慣を身につけているか否かという点にあったことが明らかになった。それは、両親（2 世）の日本での就業機会や行動範囲の差としてあらわれる。親世代のこのような経験の差により、3 世のなかに経験の多様性（自己同定、アイデンティティ葛藤、階層移動など）が生じた。さらに、「中国残留孤児・婦人等」の記憶が日本社会において忘却されていくなかで、当事者である 3 世自身が自らの家族の物語を言語化することが難しくなっていることが聞き取りから浮き彫りになった。この点は、中国帰国者としてのアイデンティティのゆらぎとなって個々の 3 世によって経験されてきた。

4 結論

本研究から、中国帰国者 3 世についてはその家族（1 世 2 世）がどのように日本へ帰国 / 移住してきたのかという歴史 / 制度的な諸要因が 3 世の人生経路に重要な影響を及ぼすこと、また、それらの分析の重要性が示された。さらに、帝国崩壊後の人の移動という歴史文脈とあわせて、日本への「移民」でもあるという要素もともに分析されることで、中国帰国者の経験がより鮮明に理解されることも明らかになった。

文献

Alejandro Portes, and Rubén G. Rumbaut, 2001, *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation*, University of California Press. (= 2014, 村井忠政訳者代表, 房岡光子・大石文朗・山田陽子・新海英史・菊池綾・阿部亮吾・山田博史訳『現代アメリカ移民第二世代の研究——移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」』明石書店。)

蘭信三, 2009, 「課題としての中国残留日本人」(蘭信三編『中国残留日本人という経験——「満洲」と日本を問い続けて』勉誠出版, (15)-(70)).